

不登校の訪問臨床

—— 訪問者との対面が困難な「面壁ケース」の検討 ——

吉井 健治

(キーワード：不登校、訪問臨床、ひきこもり傾向、面壁ケース)

I 問題と目的

本論文は、ひきこもり傾向の不登校の青年に対する家庭訪問による心理的支援（「訪問臨床」）の事例の中で、稀に見られる事例、すなわち青年は訪問への期待を示しながらも訪問者と対面することが困難だったという訪問事例（「面壁ケース」）について検討する。

(1) ひきこもり傾向の不登校の青年に対する「訪問臨床」

不登校・ひきこもりへの対策として、家庭訪問による心理的支援の必要性が強調されてきている。文部科学省（2003）は、不登校対策として訪問型支援の推進について提言した。これにより、全国各地の自治体では訪問型支援の不登校対策事業が増えてきた。また、厚生労働省（2003）は、ひきこもり対策として訪問カウンセリングの必要性を指摘した。さらに、ひきこもり支援の民間団体は、訪問サポート士の養成を行うようになってきた。

こうした流れの以前から、心理臨床においては、古くは村山（1964）など、不登校・ひきこもりの訪問事例の論文が数多くある。最近の論文では、訪問者の属性別にみると、スクールカウンセラーの訪問事例（岩倉，2003）、開業の臨床心理士の訪問事例（大塚，1997）、臨床心理士資格をもつ学校教師の訪問事例（長坂，1997）、臨床心理士を目指す大学生・大学院生の訪問事例（篠原，2004）がある。

家庭訪問による心理的支援は、訪問面接（visiting counseling）と呼ばれており、「治療者が、不登校（登校拒否）や引きこもり等のクライアントに対して、その家庭にある程度定期的に訪問し、そこで言語面接か、可能な限りの遊戯療法を実施する治療行為である」（心理臨床大事典，2004）と定義されている。しかし、この定義には、訪問という支援形態の特質が十分に反映されていないのではなからうか。そこで筆者は、ひきこもり傾向の不登校の青年に対する家庭訪問による心理的支援をもとに、「訪問臨床」という用語を提唱したい。

訪問臨床という名称は、以下に説明するような意味で、“訪問”と“臨床”の組み合わせである。“訪問”には、医療における訪問看護（visiting nursing）、教育における訪問教育（visiting education）のように、家庭訪問をして特定の専門的活動を行うという意味が込められている。また、“臨床”には、学校臨床や病院臨床のように、特定の領域で臨床心理学的支援を行うという意味が込められている。そこで、訪問臨床について次のように定義する。訪問臨床とは、臨床心理士およびこれに準ずる者である訪問者が、対象者の家庭を訪問し、対象者およびその家族に対して、一定のアセスメント（状況・状態像・要求などの把握）に基づいて、訪問の構造（時間、場所、関係性、活動内容、安全性など）を調整しながら、臨床心理学的支援を行うことである。

(2) 訪問者との対面が困難な「面壁ケース」

筆者はここ数年、ひきこもり傾向の不登校の青年の訪問臨床に携わってきたが、こうした中で稀な訪問事例に出会った。それは、青年は訪問への期待をある程度示しながらも、訪問者と対面することが困難だったという事例である。青年は訪問者と対面することはできないにもかかわらず、ドアや壁越しに交流することは可能であり、しかも訪問を拒否しないので訪問が継続するという事例である。

こうした訪問事例を「面壁ケース」と名付けることにする。その理由について以下に述べたい。筆者は、座禅を体験する機会があり、“壁に向かって座る”という「面壁」について知った。面壁という言葉は、達磨大師が中国の少林寺にある洞窟の中で、壁に面して9年間の座禅をしたという「面壁九年」の故事に由来するものである。前述したような事例を「ドア越しの面接」と呼ぶこともあるが、これは単に状態を表したに過ぎない。これに比べ、面壁という言葉には、自分自身との対峙、忍耐などの意味が含まれ、先の事例の本質が捉えられている。

訪問者が青年の部屋の壁に向かってずっと座ってる姿は面壁に似ている。他方、青年は自室で面壁のように過ごしている。両者は、立場や心理は異なるが、壁の向こうにいる相手を意識しながら、面壁を経験している。

(3) 本論文の目的

本論文の目的は、ひきこもり傾向の不登校の青年の「訪問臨床」における「面壁ケース」の検討を通して、面壁ケースの特徴、面壁ケースの青年の心理、面壁ケースへの訪問者の関わり、について検討する。本論文の意義・特徴は、次の通りである。第1に、先行研究論文の多くは訪問が効果的だった事例であるが、本論文では訪問の困難事例の検討を行う。第2に、本人と対面できない事例について、「訪問を続けるのは意味がない」、「訪問は侵襲的で逆効果である」、「訪問者は徒労感を感じる」などの否定的意見があるが、本論文では面壁ケースと名付け、その新たな意味を探究する。第3に、訪問者にとって関わりの難しい事例に焦点を当てることによって、訪問に対する青年の葛藤、訪問者の関わりの難しさがより明確化され、今後の訪問臨床に役立つ知見が得られる。

Ⅱ 方法

(1) 訪問システムについて

ひきこもり傾向の不登校の青年の「訪問臨床」は、X県およびY市の不登校対策事業の1つとして、教育委員会と大学の連携のもとで実施されている。訪問者は、臨床心理士養成の指定大学院の大学院生であり、定期的に大学教員からスーパーヴィジョンを受け、また大学内で開催される訪問臨床研修会に参加している。訪問は、週1回、60～90分間である。訪問回数の制限はないが、年度末で一旦終了し、年度ごとの申請となる。訪問を受ける家庭の費用は無料である。訪問者には県・市から交通費程度が支払われる。筆者は、本事業の開始当初から、事業運営の協力者、訪問臨床研修会の講師、訪問者の指導員としての役割を担ってきた。

(2) 本論文の対象となった面壁ケース

本事業開始後の4年間の事例数は、177例だった。年度別事例数は、開始年度から順に36例、41例、46例、54例だった。訪問の成否はともかく、訪問者と青年が対面できたかどうかを基準にすれば、多くの事例が最初から対面して交流することができた。他方、対面が難しい事例は、毎年数例が見られた。

訪問者との対面が困難だった事例には3タイプがあった。①「最初から訪問を拒絶して対面できなかった事例」：本人の意志の確認がとれていなかったことが主な原因である。訪問5回以内で、派遣の中止が決定された。②「次第に対面できるようになった事例」：青年は、最初は警戒して訪問者と対面できなかったが、次第に安心感、信頼感をもつようになり対面できるようになった。訪問10回以内で、対面しての交流ができるようになった。③「長期間、対面が難しかった事例」：青年は、訪問を拒否してはいなかったが、長期間、訪問者と対面することはできなかった。20回以上（5ヶ月以上）継続的な訪問を行ったにもかかわらず、訪問者と対面することはほとんどなかった。

最後のタイプが面壁ケースであり、177例のうち4例だけだったので、稀な事例といえよう。この内訳は、中学生男子2例、高校生男子1例、高校生女子1例である。以下では、男子の3ケースを簡潔に提示する。

Ⅲ 事例

事例の提示にあたって、「事例の概要」はプライバシー保護のため最小限にとどめた。「訪問の経過」は、訪問者の報告書、研修会資料をもとに要点をまとめた。「訪問者の関わり」は、筆者が訪問者から聴き取った内容をもとにした。記述形式は次の通りである。訪問者はV (visitor) で示した (V1, V2, V3の番号を付した)。訪問者の発言は< >, 青年や家族などの発言は「 」, 補足説明は(), 聴き取りの際の筆者の発言は《 》で示した。

(1) 訪問事例A：将棋を媒介とした中学生男子の面壁ケース

【事例の概要】Aは、いじめがきっかけで、小学5年生の9月頃から不登校になり、中学校にも全く登校しなかった。Aは、父や兄と釣りに行ったり、母親と買い物に行ったりなど、家族との交流はあった。

【訪問の経過】訪問者V1 (20代、男性、大学院生) は、Aが中学2年生の6月から翌年3月まで、10ヶ月間、28

回の訪問を行った。なお、V1の訪問以前の前訪問者は、中学1年生時に継続的な訪問を行ったが、Aが全く交流できなかったため、母親と話をしていた。第1期（#1～#11）、Aと対面することはできなかったが、将棋を通じて交流できるようになった。前訪問者は、手紙を何回か試みたが、Aからの反応は何もなかった。そこでV1は、Aが好きな将棋をすることを提案した。すると、Aは自ら将棋盤を用意して、やる気を示した。しかしAは対面は拒否したので、母親が将棋盤を持って、居間にいるV1と自室にいるAの間を行き来するようになった。母親は、Aが「そうきたか」などと口にした言葉や考え込んでいる様子をV1に伝え、反対にV1の様子をAに伝えた。しばらくしてAは、V1のいる居間の近くの部屋に移った。近い距離になったので、Aの息づかいや将棋を指す音が、V1に直接聞こえるようになった。Aは、V1が帰るとすぐに居間に出てきて、将棋盤を見ていた。母親の話では、AがこっそりとV1の姿を見ることがあった。将棋は、2、3回の訪問で1局の勝敗が決まるというペースで進んだ。第2期（#12～#28）は、AがV1に気遣いや安心感を示すようになった。#12からは毎回のようにお茶やお菓子を自主的に用意してくれたり、V1が帰る際に片手だけを見せて手を振ってくれた。母親が仲介して将棋をする状況は変わらなかったが、二人は将棋に集中していた。接戦の末に、大抵はAが勝った。Aは、劣勢になると、悔しがったり、長時間考え、勝負を楽しんでいた。V1が「<参りました>」と言うと、「ありがとうございました」というAの声が聞こえることもあった。また、Aが母親と話している時の声や笑い声が聞こえることもあった。しかし、母親が顔を見せたらと勧めても、Aは渋って、最後まで一度もV1と対面しなかった。V1が手紙を出したのは、訪問の終了を告げるための1回（#25）だけだった。

〔訪問者の関わり〕《対面できなかったことをどう思う?》Aと対面する試みは、あまり行わなかった。最初は対面したかったが、しだいに将棋に集中している状況の心地良さを感じるようになり、無理して対面しなくてもいいと思うようになった。むしろ対面することが怖いような、どう振る舞ってよいか分からないような気持を感じた。訪問時間以外の時に、ふとAの現実や将来を考えると、やりきれなさ、無力感を感じることもあった。《心理臨床家になっていく上で学んだことは?》感覚を磨くのに役立った。Aと直接関わる母親の姿や口調から、Aの状態を推測していたので、母親の状態にも敏感になった。

(2) 訪問事例B：手紙を媒介とした中学生男子の面壁ケース

〔事例の概要〕Bは、中学1年生の秋頃から登校を渋り、中学2年生の5月から不登校となり、自室に閉じこもった。そして、用件は母親にメモを渡したり、食事は自室で食べたりなど、家族から完全に断絶していった。Bは、幼少期から大人しく、人と会話することは少なかった。小説などの読書が好きで、また自主的に勉強するなど学習意欲は高かった。人との交流を拒絶すること以外に、周囲の者が了解できないような言動は見られなかった。

〔訪問の経過〕訪問者V2（20代、男性、大学院生）は、Bが中学3年の9月から翌年3月まで、7ヶ月間、23回の訪問を行った。第1期（#1～#6）は、V2が家に着くと、Bはすぐにトイレなど家の中に隠れ、V2が帰るまで全く出てこなかった。しかし、母親の話では、Bが訪問を嫌がっている様子は全く見られなかった。そこでV2は、応接間で母親からBの近況を聞いた後、Bへの短い手紙を書いて置いていった。手紙には、V2の自己紹介や訪問の意図を書いた。母親の話では、Bは自室から手をのばして手紙を受け取り、読んでいた様子だった。しかし、この時期はBからの返信は全くなかった。V2は帰り際に、家の中に隠れているBに聞こえるように、「また来週来るからね」と大きな声をかけて帰っていた。第2期（#7～#13）は、手紙による交流ができるようになった。#7に、初めて返信があった（内容は好きな食べ物、本、音楽）。母親の話では、Bは2年ぶりに自分で髪を切ったり、V2が帰るときにこっそりと手を振ったり、少し変化が見られた。#8からは毎回、V2はBが隠れているトイレの近くに行き、少し声をかけるようにした。Bは何も言わなかったが、トイレの磨りガラスの向こうで頷いている姿は見るようになった。この時期Bは、V2の手紙の質問に答えるようなかたちで、短い返事を毎回書いてくれた。話題は好きな小説についてだった。第3期（#14～#23）は、手紙の交流を通じて、V2への関心を示すようになり、また自分の内面を見せるようになった。Bは、「V2さん（個人名）は、僕のことを心配してくれていると感じます。訪問してくれてうれしいです」（#15）と、訪問を受け入れている気持を表明した。そして、「V2さんのことをもっと知りたい」（#15）とV2への関心を示し、テレビ番組などの日常的な質問（#16）から始めて、「子どもの頃の話をかかせてくれませんか」（#17）などへと深まっていった。さらに展開して、「僕はコミュニケーション能力が低いので、友達は1人もいません。学校では孤立していました」（#18）、「V2さんは、僕を変えようとしているけれども、僕が間違っているということでしょうか」（#18）、「V2さんは、僕の欠点を受け入れてくれて、なぐさめてくれる優しい人」（#19）、「僕は人とどう接しているのか分

からないのです。言葉にして言うのが苦手です」(#22)と、正直に自分の気持を書いた。しかし、訪問の終了まで、トイレの磨りガラス越しに頷く姿を見せるだけで、言葉を発することはなかった。最後の手紙には「手紙のやりとりができてよかったです」(#23)と書かれていた。その後Bは、高校受験に行くことができた。

[訪問者の関わり]《磨りガラス越しはどんな感じ?》頷く姿が見えるだけで、声も出さない、音も立てない。《対面できなかったことをどう思う?》できれば会って交流したかったが、今のBと話をするのは難しかった。話しかけても何の返事もないので、Bがどう感じているのか分からないし、一方的に話かけるのはむなしい。それで手紙にした。手紙からは、Bは人と関わりたいのだが、恥ずかしさ、恐怖心があることが伝わってきた。最初は、会って何かしてあげたい、外に出してあげたいと思っていた。しかし、会えなかったので、訪問の意味を疑うこともあった。腹は立たないが、むなしさがあった。その後は、会うことよりも手紙で交流できればよいと思うようになり、手紙が楽しみになった。交流が大事なのであって、顔を合わせる必要が大事なのではないと思っていた。《手紙の工夫や意味は?》最初は、訪問者がどんな人なのかを自己開示した。そして、好きな食べ物や音楽の内容で、()に記入などの形式で、クローズド・クエスチョンをした。その後は、回答欄を大きくして自由度を増したり、訪問についてどう思っているのかなどのオープン・クエスチョンも取り入れて、内面にふれる質問に発展させた。自分もある程度自己開示した。《心理臨床家になっていく上で学んだことは?》忍耐強く待つことの大切さを学んだ。会えないことで、自分の感覚が研ぎ澄まされていく感じがした。

(3) 訪問事例C：ゲームに没頭する高校生男子の面壁ケース

[事例の概要] Cは、高校2年生から不登校となった。小学校時代、親が離婚し、母親の再婚相手から心理的・身体的な嫌がらせを受けた。この経験からCは、大人の男性への不信感をもった。中学校時代は、運動系の部活で活躍し、成績は優秀だった。高校も同じ運動系の部活に入ったが、怪我をしたので退部した。そして高校2年生から不登校になり、次第にオンラインゲームに没頭していった。

[訪問の経過] 訪問者V3(20代、男性、大学院生)は、Cが2回目(留年)の高校2年生の7月から3回目(再留年)の高校2年生の3月まで、1年9ヶ月間、52回の訪問を行った。V3は、Cの自室のドア越しに自己紹介をした。V3が<中に入ってもいい?>と尋ねると、Cは「無理」とだけ言った。<ここで話してもいいかな?>。「知らん」。<いま何をしているの?>。「べつに」。このようにV3が質問しても、Cは短い返事をするだけだった。しかし、訪問の始めと終わりにV3が挨拶すると、Cからは「あー」と返事があり、訪問を拒否しているのではなかった。母親の話からも、Cは訪問を嫌がっている様子ではなかった。ところが、#16に状況が一変した。V3が、<部屋に入ってパソコンを見せてもらってもいい?>と言うと、Cが「あー」と返事したので、初めて入室できた。#17も入室してゲームを見せてくれ、#18には居間で一緒に格闘ゲームをすることができた。しかし、理由は不明だが、再び入室を拒むようになり、以前と同様の状況が続くようになった。年度替わりに、V3が訪問への意向を確認すると、Cは「あー」とだけ返事し、拒否はしなかったので、次年度も訪問を継続することになった。しかし、その後も入室を拒否し会話もない状況が最後まで長期間続いた。V3は、Cの部屋の壁の前に座って、声をかけたり、手紙を書いたり、本を読んだり、猫とじゃれたりして過ごした。ただし、突然、#48だけは入室を許してくれ、Cが勉強していたので、V3が問題を出すと答えてくれたり、V3の冗談にニヤッと笑ってくれることがあった。年度替わりに、今後の訪問の引継ぎについて尋ねると、「やめる」と返事したので、訪問は終了となった。

[訪問者の関わり]《対面できなかったことをどう思う?》最初は、ひきこもりから脱出させたいと思っていた。しかし、Cからはほとんど返事がなかった。思い切って部屋に入ろうと思うこともあったが、Cが機嫌を悪くしては大変だと思ってやめた。なぜ部屋に入れてくれないのか、なぜ返事をしてくれないのかと、やりきれなさや怒りを感じることもあった。自分の関わり方がまずいのだろうか、訪問は意味があるのだろうか、と思うことも度々あった。《そこで、どのような気持ちに変化したの?》いろいろ悩んだ末、Cを救い出すという考えではなく、Cから何かが出てくるのを待つことにした。Cが必要としたときに、僕が側にいることが大事だと思うようになった。壁に向かって座っているとき、あれこれ意味を考えないようにした。《Cとはどんな交流があったと思う?》直接、交流できたのは、パソコンのゲームをした時(#16~#18)と、勉強をした時(#48)の2回だけだった。それ以外は、僕の目の前にあるのは壁だった。壁を通して僕はCの気配を感じていた。キーボードを叩く音、テレビの音声、あるいは静かな時には息づかいや寝返りの音も聞こえてきた。僕は、Cがそこにいることを感覚で感じていた。互いに気配のやりとりをしていたように思う。《心理臨床家になっていく上で学んだことは?》他の来談ケースで、何も言葉で応えてくれなくても対面できるだけでもいいと思えるようになった。

IV 考察

(1) 面壁ケースの特徴

訪問の受入は、「期待」と「交流」の2要因を基準に4タイプに分けられる(図1)。期待の要因は、訪問者と会う準備をしたり、活動内容を考えたりなど、訪問を期待することである。交流の要因は、訪問者と会話したり、一緒に活動を楽しむなど、訪問者と交流することである。「良好型」は、期待も高く交流も可能なタイプであり、訪問を楽しみにしており、訪問者との会話もスムーズなので、比較的安定して訪問が継続する。「受動型」は、期待は低いが交流は可能なタイプであり、“来る者拒まず”という受入の態度で、楽しみにしている様子は見られないが、訪問者との交流はスムーズにできる。他方、「拒否型」は、期待も低く交流も困難なので、数回の訪問で、これ以上の訪問は難しいと判断される。最後に、「葛藤型」は、ある程度の期待は見られるが交流が難しいタイプである。面壁ケースは、この葛藤型に該当する。なお、訪問が続くうちに、受動型や葛藤型が、良好型に移行したりなど、タイプは流動的である。

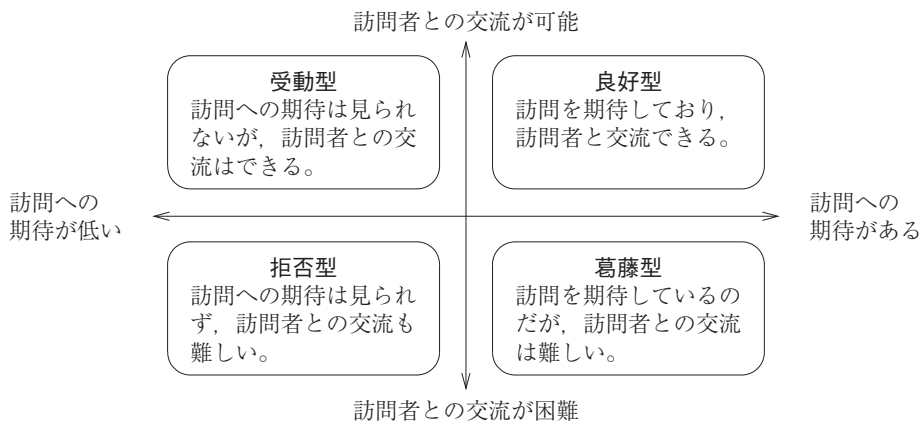


図1 訪問の受入の4タイプ

葛藤型の1つとしての面壁ケースは、期待の要因から見ると、明確な拒否はしておらず、むしろ少し楽しみにしている様子がある。しかし、交流の要因から見ると、対面も会話も困難である。つまり、訪問に対する接近回避葛藤がある。また、保護者や関係者の連携・協力が得られない場合は、訪問が中止になることが多いが、面壁ケースにはこうしたことはない。訪問を中止する理由が特別見あたらないからこそ、訪問は継続する。したがって、面壁ケースの特徴を列挙すると、表1の通りである。

表1 面壁ケースの特徴

- | |
|---|
| ①期待の要因：訪問に対して拒否を示さず、むしろ期待がみられる。
②交流の要因：訪問者との対面や会話を避ける。
③葛藤型の特徴：訪問者に対する接近回避葛藤がある。
④良好な連携：家族や関係者は訪問に協力的である。
⑤訪問の中止理由の不在：対面や会話が困難なこと以外に、訪問を中止する特別な理由がない。 |
|---|

(2) 面壁ケースの青年の心理

面壁ケースの青年が、訪問への期待を示しながらも、訪問者と対面することを回避するのはなぜだろうか。この理由について以下の4点を指摘することができる。

第1に、訪問の時期の問題がある。ひきこもりの「底の段階」では訪問は控えるべきだと言われているように(山下, 1999, p. 84), 訪問を受け入れる心理的な準備状態が必要である。訪問の時期が違えば、別な展開が見られたかもしれない。第2に、青年は対面しないという距離感が安心できることである。そして、この状態で訪問者との関係が仮の安定を得たため、変化を恐れて、対面を回避し続けたと考えられる。第3に、青年はコフート(Kohut, 1984)の言うような「自己の傷つき(damage of the self)」を抱え、人に対する恐怖心や被害感をもつと考えられる。提示事例では、AとBはいじめ被害、Cは継父からの心理的・身体的な嫌がらせ、という

外傷体験があった。自己の傷つきは、こうした外傷体験の他に、幼少期から非共感的対応に曝されてきた生育歴・家族関係の問題、また外傷体験後の非共感的対応による二次的問題が重複して影響している場合がある。第4に、青年は人刺激に過敏に反応する気質があり、人と対面することに苦痛を感じると考えられる。相手と対面することは、視線、声、表情、仕草、匂いなどの人刺激を直接的に交換することである。彼らは、こうした人刺激に対する閾値が低いと、あるいは人刺激に対する障壁がうまく機能しないため、自分を脅かす過剰刺激として感受される。このことは、過敏型自己愛人格傾向の青年の「選択的に過敏な感受性」(吉井, 2008)と同様の意味である。

面壁ケースの青年は、訪問者と対面することができなかったが、訪問者と会いたい気持と会いたくない気持の両方を見せていた。彼らは、どのような接近回避葛藤をもっているのだろうか。以下に4つの接近回避葛藤について述べる。

第1に、「自己否定への囚われ」と「自己肯定の希求」の葛藤がある。面壁ケースの青年は、自己の傷つきのために自己否定に囚われている一方で、自分の存在を認めてほしい、肯定してほしいという気持をもっている。極端な自己否定の態度は、自己陶酔的な側面があり、特別な存在として認めてほしいという潜在的に高い自己愛に由来するものと考えられる(岡野, 1998; 吉井, 2008)。第2に、「理解者への失望」と「理解者の希求」の葛藤がある。青年は、過去の経験から自分はこれまで十分に理解されてこなかったという感覚が強く、理解者の存在に失望している。他方で、幻想的で理想化された理解者の存在を信じ、この人に完全に理解されたいと思っている。理解者との一体感や以心伝心を求めているので、少しでも批判・否定を受けると、理解されていないと感じ、抑うつ、怒り、逃避が起きてしまう。この葛藤の背景には、重要な他者との関わりの中で、脱錯覚や脱幻想などの喪失体験があると考えられる。こうした対象喪失に対する悲哀の作業が必要である。第3に、「再外傷体験への恐れ」と「自己開示」の葛藤がある。青年は、他者と関わることによって、以前と同様の心的外傷あるいは共感不全を経験して、さらに傷つくのではないかと、再外傷体験への恐れをもっている。他方で、率直に自分を見せ、理解してほしいという、自己開示の気持もある。それゆえ、訪問者と対面しないで、壁などを介することによって、つかず離れずの関係や、安心・安定できる距離感を保っている。アスパー(Asper, 1991)は、自己愛の傷ついた人が他者から心理的距離をとって、痛みを感じないように、さまざまな防衛を使う態度を、「守りの態度」と呼んだ。それゆえ訪問者は、守りの態度を尊重しつつ、青年に安心感をもたせるまで地道に関わる必要がある。第4に、「異質性」と「同質性」の葛藤がある。青年は、自分と他者とは異質な存在だと感じ、孤独感を抱えている。他方で、自分と他者は同じ・似ているといった同質性を認めたい気持も強い。この葛藤の背景には、サリヴァン(Sullivan, 1953)が提唱した「チャム(chum)」の問題がある。彼らは、心理発達の課題または現実的要因(転居など)のためにチャムを得られなかったという「チャム形成不全」の問題、あるいは、チャムはいたが、友人関係問題(いじめなど)のために、チャムを失ったという「チャム喪失」の問題があると考えられる。それゆえ、チャム体験を得ることが必要である。

(3) 面壁ケースへの訪問者の関わり

面壁ケースのような青年に対する訪問者の対応は、「積極的アプローチ」と「待ちのアプローチ」に大別される。「積極的アプローチ」は、青年は他者の侵入を拒む気持と脱出を望む気持でアンビバレントであるから、脱出するための力を外部から加えるの必要があり、訪問者は積極的に面会を試みる方がよい、という見解である。他方、「待ちのアプローチ」は、ひきこもらざるを得ない青年の気持を尊重することが大切であり、訪問者が無理に面会しようとするのは侵襲的であり、積極的な関わりは控えた方がよい、という考えである。

訪問家族療法を行っている精神科医の水野(1991)は、十分な配慮をした上で、面会を躊躇する青年の自室に、積極的に入り込んで援助している。一方、斎藤(2002)は、「部屋に押し入る、体に手を掛ける、本人を批判するといった行為のすべてを、状況いかにかわらず、暴走ないし暴力である」と述べ、介入の危険性を指摘している。どちらかといえば、水野は「積極的アプローチ」、斎藤は「待ちのアプローチ」に該当するといえよう。

われわれの訪問臨床は「待ちのアプローチ」である。訪問者は、青年と会えなくても、決して強硬な態度・手段はとらない。家族が訪問者の働きかけに大きな期待を寄せる場合もあるが、訪問者がこれに応えることには慎重でなければならない。しかし、何もしないで、ただ待つだけではない。手紙を渡すこと、媒介物(本、CDなど)を使うこと、訪問者が家族やペットと交流する姿を示して青年に安心感をもたせること、家から離れて外で活動すること(テニスなど)、のように工夫できることは多い。いわば、“裏口から堂々と入る”ことを試みるのである。こうした対応の結果、最初は面会できなかったが、訪問10回以内で対面して交流できるようになった事

例は数多くある。しかし、面壁ケースの場合は、こうした対応を試みても、対面は困難だった。

面壁ケースにおける訪問者と青年の関係性のプロセスは、以下の①から④の段階の順に展開すると考えられる。なお、①から③までは、「訪問者のテーマ」対「青年のテーマ」というスタイルで記述した。

①「模索」対「警戒」の段階：訪問者は、対面を試みたり、声をかけたり、手紙を書いたりなど、関係づくりを模索する。他方、青年は、こうした訪問者の行動を警戒している。

②「一方通行」対「観察」の段階：訪問者の関わりは一方通行である。対面できない、会話できない、手紙への返事がない、などから、訪問者は孤独感や無力感を感じる。また、侵入的になって傷つけてはいけないと思う反面、思い切って部屋に入って向き合いたいという気持が起こることもある。他方、青年は、こうした訪問者の状態や心理を見て、安心できる人なのかどうかを観察している。事例 B が後の時期になってくれた手紙には、「V2さんは僕を変えようとしているけれども、それは僕が間違っているということでしょうか」と書いてあった。この時期、青年は、慎重に相手を見極めようとしている。

③「兆し」対「葛藤」の段階：訪問を重ねていくと、対面はできないけれども何らかの反応が返ってくるようになり、変化の兆しが見られる。訪問者は、青年が訪問を拒否していないことを確信する。青年は、意識化や言語化はしないかもしれないが、前述したような接近回避葛藤をどこかで感じていると推察される。

④「共にある関係」の段階：対面はできないけれども、この時期になって初めて、訪問者の流れと青年の流れが合流する。訪問者は、対面することへのこだわりが少なくなり、青年のニーズに合わせて交流しようとする。訪問者は、以前に比べて、自然な自分であることができるようになる。青年は、前述した葛藤を抱えながらも、訪問者に対して少しずつ安心感を抱き、心を開いてくる。訪問者と青年の関係は、事例 A では共に将棋を楽しみ、事例 B では共に手紙を楽しみにしていた。事例 C は、目に見えた変化は少なかったが、青年はドアの向こうに座している訪問者を自然な日常として受け入れていた（安心した中での居眠りなど）。二人はドアを隔てて共にそこにいたといえよう。

事例 A は、引継の事例だったが、前訪問者の時に①、②の段階、V1の時に③、④の段階が見られた。事例 B は、上記のプロセスに最も適合し、①から④の段階を順にたどった。事例 C は、①、②の段階に止まったが、③、④段階の特徴がわずかに見られた。

(4) 面壁ケースに特有な訪問者の関わりの様式

われわれの訪問臨床では、訪問者の関わりの様式として次の4つを考えている。①「チャムの関わり」：年齢は異なるが、本質的にチャム（同性同年輩の親しい友人）のように関わること。②「ニューオブジェクト的関わり」：これまで青年が求めていたけれども出会えなかった新しい人物として関わること。③「指導者的関わり」：教科学習と進路選択の支援をしたり、ソーシャルスキルを習得させること。④「カウンセラー的関わり」：心理的課題に焦点づけて話を聴くこと。ところが、面壁ケースの場合は、上記のいずれにもうまく適合しない。それでは、面壁ケースにおける訪問者の関わりの様式は何だろうか。

訪問者は、青年と対面も会話もできなかったので、青年の“気配を感じること”に集中していた。気配には、将棋を指す音（事例 A）、磨りガラスに映った頷く姿（事例 B）、キーボードを叩く音（事例 C）などがあつた。訪問者は、こうした気配から青年の心理状態を察知して、声をかけ、手紙を書き、黙って座り続けるなどした。訪問者は、直接の交流ができないからこそ、言語以前の感覚を研ぎ澄まして関わっていた。このような訪問者の関わりは、「コミュニオン調律（communioning attunement）」と考えられる。スターン（Stern, 1985）は、「コミュニオンは、他者が何をしようが何を信じていようが、それを全く変えようとすることなく、その人の体験を共有することを意味する」（小此木・丸田監訳, 1989, p.173）と述べている。

訪問者と青年は、面壁の状況で“似たような体験”をしていた。両者は、立場は異なるが、共に、孤独感を感じ、相手の気配に敏感になり、葛藤を抱えながら過ごした。このような訪問者の関わりは、「分身自己対象（alter-ego selfobject）」と考えられる。コフォート（1984）は、分身自己対象とは、本質的に類似しているという安心の体験を与える、と述べている。

訪問者は、青年の気持の流れに寄り添って、“共にいること”に努めた。青年は、これまで出会ったことのない“温かな沈黙の存在”として訪問者を感じていたと推察される。このような訪問者の関わりは、村上（1992）の「伴侶者」に通じるものである。

以上のように、面壁ケースにおける訪問者の関わりの様式は、コミュニオン調律、分身自己対象、伴侶者の視点から説明される。筆者は、これらを総合して、「共にある関係」と呼ぶことにしたい。共にある関係とは、自

己と対象のあいだに同質性、類似性、共通性が存在するという意味である。共にある関係の経験は、集団精神療法の治癒的要因の「普遍性 (universality)」と同様に、“私は独りではない”という感覚を喚起すると考えられる。

ハーマン (Herman, 1992) は、心的外傷から回復するには、他者との新しい結びつきをつくるという「再結合 (reconnection)」が必要であると、それは、「私は一人ではないという発見を以て始まる」(中井訳, 1999, p. 341) と述べている。面壁ケースの青年は、人間関係の“つながり”を失って、深く重い孤独感を抱えている。このような青年にとって「共にある関係」の経験は、“私は独りではない”という感覚をもたらし、孤独感を和らげ、そして人とのつながりの回復を促進させるといえよう。

(5) おわりに

本論文では、面壁ケースの青年が訪問者への接近回避葛藤を抱えていること、また面壁ケースに特有な訪問者の関わりの様式があること、が明らかにされた。このことから、対面も会話もできない面壁の状況で、潜在的に展開する訪問者の関わりの意義が示唆された。今後の課題は、臂を斬ってまでも達磨に道を求めるという「慧可の断臂入門」(水上, 1988, Pp. 16-17) に象徴されるような、面壁に対する訪問者の切断機能についての検討が必要である。面壁ケースの訪問者には、高い動機づけ、根気強さ、そして自分自身との対峙が求められる。筆者は、訪問臨床研修会で、このような訪問者への激励の意味を込めて、“最も困っている人は動けない”(人に相談することも、来談することもできない)という厳しい現実、訪問臨床が挑戦することの意義を強調している。

文 献

- Asper, K.(1991) : *Verlassenheit und Selbstentfremdung* 4. Auflage, Walter Verlag. 老松克博 (訳) (2001) : 自己愛障害の臨床－見捨てられと自己疎外 創元社
- Herman, J.L.(1992) : *Trauma and recovery*. Basic Books. 中井久夫 (訳) (1999) : 心的外傷と回復 みすず書房
- 岩倉 拓 (2003) : スクールカウンセラーの訪問相談－不登校の男子中学生3事例の検討から－ 心理臨床学研究, 20(6), 568-579.
- Kohut, H.(1984) : *How does analysis cure?* The University of Chicago Press. 本城秀次・笠原 嘉 (監訳), 幸 順子・緒賀 聡・吉井健治・渡邊ちはる (共訳) (1995) : 自己の治癒 みすず書房
- 厚生労働省 (2003) : 10代・20代を中心とした「社会的ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン (最終版) 日本精神病院協会
- 水上 勉 (1988) : 禅とは何か－それは達磨から始まった 新潮社
- 水野昭夫 (1991) : 家族がひらく－登校拒否・非行の往診家族療法 日本評論社
- 文部科学省 (2003) : 今後の不登校への対応のあり方について (報告)
- 村上英治 (1992) : 人間が生きるということ 大日本図書
- 村山正治 (1964) : 登校拒否中学生の心理療法 臨床心理, 3(3), 49-61.
- 長坂正文 (1997) : 登校拒否への訪問面接－死と再生のテーマを生きた少女－ 心理臨床学研究, 15(3), 237-248.
- 岡野憲一郎 (1998) : 恥と自己愛の精神分析－対人恐怖から差別論まで 岩崎学術出版社
- 大塚真由美 (1997) : 緘黙児の訪問面接の意義－コミュニティの活用－ 心理臨床学研究, 15(1), 89-97.
- 斎藤 環 (2002) : ひきこもる思春期 星和書店
- 篠原恵美 (2004) : 準専門家による訪問援助の実践的研究 カウンセリング研究, 37, 64-73.
- Stern, D.N.(1985) : *The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. Basic Books. 小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳), 神庭靖子・神庭重信 (訳) (1989) : 乳児の対人世界－理論編 岩崎学術出版社
- Sullivan, H.S.(1953) : *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. W.W.Norton. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鏑 幹八郎 (訳) (1990) : 精神医学は対人関係論である みすず書房
- 山下一夫 (1999) : 生徒指導の知と心 日本評論社
- 吉井健治 (2007) : 過敏型自己愛人格傾向の青年の事例－自己の傷つきの再体験への恐れ－ カウンセリング研究, 40 (4), 20-29.

Visiting Psychological Support for Adolescents of Non Attendance at School

— Discussion of “the Case of Menpeki” —

YOSHII Kenji

(Keywords : non attendance at school, visiting psychological support, the case of menpeki)

In our practice of psychological support, graduate students have visited homes of adolescents of non attendance at school, and they have performed psychological support.

There were some rare cases in our practice of several years. Adolescents of non attendance at school had expectation to meet visitors, but they couldn't meet visitors. They couldn't come out of their room, then visitors talked across a wall of their room. Visitors sat down towards a wall outside their room as if Bodhidharma sat down towards a wall in a cave. The author named such case “the case of Menpeki” from words of the Zen.

A purpose of this article is to examine the characteristic of “the case of Menpeki”, the psychology of adolescents of “the case of Menpeki”, and the relationship between the visitor and the adolescent of “the case of Menpeki”. This article presented three cases of “the case of Menpeki”.